

江田村西遺跡No. 2

老人ホーム建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023.5

前橋市教育委員会
大和ハウス工業株式会社
有限会社毛野考古学研究所

江田村西遺跡No. 2

老人ホーム建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



H-4号住居跡出土の高杯 (1/3)

2023.5

前橋市教育委員会
大和ハウス工業株式会社
有限会社毛野考古学研究所

例　　言

1. 本報告書は、老人ホーム建築に伴う江田村西遺跡 No. 2発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、大和ハウス工業株式会社群馬支社より委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が前橋市教育委員会の指導・監理のもとに実施した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺　　跡　名　称	江田村西遺跡 No. 2
調　　査　場　所	群馬県前橋市江田町字村西 361、363-1、363-3、363-4、363-5、365-3、366-1
遺　　跡　コ　ー　ド	4 A 279 (前橋市 0275・0276 遺跡)
発　　掘　調　査　期　間	令和4年10月10日～令和4年12月17日
整　　理　・　報　　告　作　成　期　間	令和4年12月19日～令和5年5月31日
発　　掘　・　整　　理　担　当　者	南田法正（有限会社毛野考古学研究所）・松本喜臣（有限会社毛野考古学研究所） 〔遺構測量・空撮〕小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所、測量士補） 田村貴廣（有限会社毛野考古学研究所、測量士補）
4. 本書の作成は、前橋市教育委員会の指導・監理の下、松本・南田が編集した。
原稿執筆はIを並木史一（前橋市教育委員会）、Vを松本・南田、ほかを南田が担当した。
遺物の写真撮影は井上 太（有限会社毛野考古学研究所）が実施した。
遺物の実測・観察表作成は燃河内昭彦（有限会社毛野考古学研究所）が行なった。
5. 発掘調査・整理作業に関わった方々は次のとおりである。
【発掘調査】小関泰洋・北野進二・佐藤闇雄・白砂福造・新開昌代・細井美佐子・武井博行・田中 進
【整理作業】石川陽子・柴田弘信・千木良有香子・富澤友理・真下弘美
6. 発掘調査で出土した遺物および図面・写真等の資料は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸氏・機関に有益な御指導・御協力を賜った。
記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）
有限会社ジェイプラン　　永井智教

凡　　例

1. 遺構図の縮尺は、平面図及び土層断面図を1/80・1/40縮尺で表現することを基本として掲載した。各挿図中にはスケールを付してある。また、図中の北方記号は座標北を示し、座標値は世界測地系に基づいている。遺構図の塹土・灰層・炭化物・Hr-FA 泥流などのトーンは、各挿図中に凡例を示してある。
2. 遺物実測図の縮尺は、1/2～1/6縮尺の範囲で掲載し、図中にスケールを付してある。
遺物写真は遺物実測図とほぼ同縮尺である。
3. 遺物実測図のトーンは次の意味を表す。　須恵器（硬質）■　他のトーン凡例は図中に併記した。
4. 遺構及び遺構内施設の略記号は、次のとおりである。

H: 堆穴住居跡	T: 堆穴状遺構	B: 挖立柱建物跡	P: ピット	D: 土坑	W: 溝
----------	----------	-----------	--------	-------	------
5. 遺構覆土および土器類の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 2006）に拠った。
6. 本文中や挿表中において、〈 〉は残存値を、() は推定値を、それぞれ示す。
7. 本書で使用する火山灰指標テフラの略称は以下のとおりである。　As-A: 浅間A軽石（西暦 1783 年）
As-B: 浅間B軽石（西暦 1108 年）　　Hr-FA: 棣名山ニツ岳渋川テフラ (Hr-S・6世紀初頭)
As-C: 浅間C軽石（3世紀後葉～末葉）　　Hr-FP: 棣名山ニツ岳伊香保テフラ (Hr-I・6世紀中葉)
各テフラ・軽石を混入する土壤および遺構覆土は、A混土・B混土・C混土・FA混土などのように略記した。
8. 本書作成のために使用した引用・参考文献については、紙数の都合で大半を割愛した。ご寛恕願いたい。なお、III-2. 歴史的環境では各発掘調査報告書に加え、前橋市教育委員会 2008『年報第38集 平成19年度文化財調査報告書』、宮田ほか 2011『菅谷・村東遺跡』・小泉範明 2005『史跡 日高遺跡』高崎市教育委員会、大江・平野ほか 1982『日高遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団・『新編高崎市史 資料編1～3』1996・1999・2002、笠原ほか 2008『天神III遺跡』、山崎 一 1971・1978『群馬県古城壇址の研究 上・下巻』を主に引用・参照した。

目 次

例 言 凡 例 目 次

I 調査に至る経緯	1	V 遺構と遺物	4
II 調査の方法と経過	1	1. 遺跡の概要	4
III 地理的・歴史的環境	2	竪穴住居跡（古墳時代前期～中期）	
1. 地理的環境	2	古墳時代の墓跡	
2. 歴史的環境	3	溝・掘立柱建物跡・ピット・	
IV 標準堆積土層	4	遺構外出土遺物	
		VI まとめ	20

写真図版 抄 錄 奥 付

挿 図 目 次

Fig. 1 調査区域図	1	Fig.10 H-4号住居跡（2）	12
Fig. 2 道路位置図	2	Fig.11 H-6・7号住居跡（1）	14
Fig. 3 周辺の遺跡	3	Fig.12 H-6・7号住居跡（2）	15
Fig. 4 基本順序	4	Fig.13 H-8・10号住居跡	17
Fig. 5 遺構全体図	5	Fig.14 H-9号住居跡	18
Fig. 6 掘立柱建物跡・ピット・溝・墓跡全体図	5	Fig.15 H-11号住居跡/W-16・17号ピット/W-1・2・4号溝	
Fig. 7 H-1～3・5・12号住居跡/D-1号土坑（1）	8	/1～6号墓跡	19
Fig. 8 H-1～3・5・12号住居跡/D-1号土坑（2）	9	Fig.16 遺物図（1）	21
Fig. 9 H-4号住居跡（1）	11	Fig.17 遺物図（2）	22

挿 表 目 次

Tab. 1 遺構一覧表	7	Tab. 3 遺物観察表（2）	24
Tab. 2 遺物観察表（1）	23		

写 真 図 版 目 次

P.L. 1 調査区遺構（東から） 調査区全貌 断面（左上が北） 調査区全貌 断面（左上が北） H-1号住居跡 完層（西から） H-1号住居跡 ④～H-12号住居跡P1 全層（南から） H-1号住居跡 南壁側土壠出（北から） H-1号住居跡 遺物出土状況（南から） H-1・12号住居跡 亂層（全層）（左が北） H-2号住居跡 完層（西から） H-3号住居跡 完層（西から） H-3号住居跡 前破れ1 完層・遺物出土状況（南から） H-3号住居跡 前破れ2・2 墓跡（西） H-3号住居跡 遺物出土状況（南から） H-4号住居跡 完層（西から） H-4号住居跡 覆土上部のH-1号泥塗および Tc号柱跡 柱跡状況（東から） H-4号住居跡 H-1号泥塗下部柱跡（東） H-4号住居跡 P1 柱跡柱頭出現（西から） H-4号住居跡 P2 空洞柱頭完層状況（西） H-4号住居跡 P3 空洞柱頭出現状況（西） H-4号住居跡 P4 空洞柱頭出現状況（西） H-4号住居跡 P6・P13・断面A・全層（北） H-4号住居跡 P6 遺物出土状況（西から） H-4号住居跡 振り方全層（土が北）	P.L. 3 H-4号住居跡 土壠断面・遺物出土状況（南から） H-5号住居跡 振り方全層（北西から） H-6号住居跡 完層（南東から） H-6号住居跡 P1 空洞柱頭現状（南から） H-6号住居跡 P5・P6（出入り口ピット） 柱穴六四・断面六五・断面六全層（南から） H-6号住居跡 P7 檻状状況（西から） H-7号住居跡 完層（東から） H-7号住居跡 P1 完層・遺物出土（西から） H-7号住居跡 P2 滲出層・中炭化物・輪出状況（北東から） H-7号住居跡 P3 墓跡（北東から） H-8号住居跡 完層（東から） H-9号住居跡 乱層（北から） H-9号住居跡 云雲（東から） H-10号住居跡 完層（西から） H-10号住居跡 振り方全層（西から） H-11号住居跡 完層（東から） H-11号住居跡 遺物出土状況（西から）
P.L. 4 W-1号溝 完層（北西から） W-2号溝 完層（北東から） W-4号溝 完層（西から） 1a・1b号墓跡 確認状況・全層（西から） 2号墓跡 完層（東から） 3号墓跡 完層（東から） 4号墓跡 確認状況・全層（北東から） 5号墓跡 完層（南から） 6号墓跡 完層（右上が北） 出土遺物（1）	P.L. 5 出土遺物（2）

I 調査に至る経緯

令和4年5月26日、江田町における老人ホーム建築を目的とした埋蔵文化財の取扱いについて、大和ハウス工業株式会社群馬支社（以下「開発者」）より、前橋市教育委員会（以下「市教委」）へ照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「前橋市0275・0276遺跡」内であるため、文化財保護法第93条第1項の届出を行う必要がある旨を開発者へ回答した。同年7月21日、市教委による確認調査の結果、竪穴住居跡等の遺構を確認したため、遺跡の現状保存に向けて協議を行なったが、計画変更是困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意に至り、同年8月3日、文化財保護法第93条第1項の届出が提出された。

発掘調査の実施にあたり、市教委直営での調査実施が困難であるため、市教委による監理・指導の下、民間調査組織による発掘調査とした。令和4年9月8日付けで開発者と民間調査組織である有限会社毛野考古学研究所の間で業務委託の契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、令和4年10月10日より発掘調査に着手した。なお、遺跡名称「江田村西遺跡No.2」（遺跡コード：4A279）の「江田」は町名、「村西」は旧小字名を採用し、「No.2」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

II 調査の方法と経過

開発範囲のうち、前橋市教育委員会による指定範囲（216m²）を調査区として設定した。表土掘削は0.45mバッカホーを使用した。各遺構は移植ゴテ等によって覆土を人力掘削した。住居跡は床面と掘り方方面的調査を行なった。調査終了後に全面を埋め戻し、下層はローラー転圧を加えた。測量用公共座標は世界測地系を基準とし、平面測量は自動追尾光波測距儀を使用して、断面測量は手実測した。遺構写真は35mm白黒・同カラーリバーサル・デジタルカメラ（Nikon D500）で撮影し、ドローン（DJI Mavic2Pro、1inchCMOS、20MP）空撮を実施した。

整理調査では、遺物の洗浄・注記・接合・復元を実施したのち、写真撮影（Nikon D750）・実測・デジタルトレース（Adobe Illustrator CS2・6）をした。遺物写真・拓本はAdobe Photoshop CS6にて加工処理した。遺構図はデジタルトレースし、PC上で断面図を整合した。執筆・割付・編集作業はAdobe InDesign CS2にて行なった。

発掘調査は、令和4年10月4日に三者（開発事業者：大和ハウス工業株式会社群馬支社、監理者：前橋市教育委員会、弊社調査担当者）による事前打合せを行なったのち、同年10月10日から12月17日まで実施した。12月12日には地元住民（江田歴史愛好会）への現地説明会を行い、併せて前橋市教育委員会による終了確認を受けた。整理調査および報告書執筆編集作業は、令和4年12月19日から令和5年5月31日まで実施した。



Fig. 1 調査区域図（前橋市地形図 1/2,500 を改変）

III 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

本遺跡は、前橋市と高崎市の市境にあたり、JR高崎線・上越線・両毛線の線路の南側に接する。北東約1.1kmにJR新前橋駅、北西800mに前橋IC。(中尾遺跡)、南西400mには国史跡の日高遺跡が立地し、東側約160mには染谷川が南流している。染谷川・牛池川合流地点と日高遺跡の中間点付近に、本遺跡は位置する。

1948年の米軍空撮写真等(国土地理院データ)を基に地形を詳細に観察すると、本遺跡地は、染谷川右岸の後背湿地である標高103m前後の低地帯内にあって、細長い微高地の畠地を形成していることが分かる。河道痕跡の地割を追跡すると、本遺跡や日高遺跡が立地する南北微高地帯は旧染谷川が形成した自然堤防であると推測され、低湿地帯の伏流水は日高遺跡(標高103m前後)での谷地湧水として現れて、下ると道木堀川となって染谷川に合流する。このような河川の変流過程において、本遺跡地の島状微高地が形成されたものであろう。

視野を広げると、井野川と広瀬川に挟まれた一帯の基盤には、利根川扇状地が形成した厚さ100mの前橋砂礫層(～2.5万年前頃)が堆積している。浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 2.4～1.9万年前)の下位に該当する2.3～2.4万年前頃には、浅間火山黒斑山の崩壊に伴う浅間宮岩屑なだれに起因した前橋泥流が15m前後の厚さで堆積し、前橋台地を形成したようである。1.6万年前頃には、榛名火山相馬山の山体崩壊による陣場岩屑なだれが発生し、榛名山東南麓に広大な相馬ヶ原扇状地を形成した。この岩屑なだれが、利根川流路を現広瀬川の辺りに固定したと考えられている。約1.3～1.4万年前には浅間板鼻黄色軽石(As-YP)が降下し、1.1万年前頃には浅間社輕石(As-SJ)の降下と、井野川と烏川の間を埋積した井野川泥流が発生している。

As-SJよりも上位には、相馬ヶ原扇状地を南東流してきた染谷川・牛池川・八幡川などが運んだ総社砂層が、およそ2～5mの厚さで広範囲に堆積し、粘質土・シルト・細砂の互層で構成される。この総社砂層が本遺跡の直接的な地山であり、黄褐色細粒シルト～灰白色粘質シルトを掘り込んで、各時代の遺構が構築されている。

主要引用・参考文献

- 早田 勉 1990 「第1章 群馬県の自然と風土」『群馬県史 通史編1』
日沖剛史 2015 「群馬県前橋市元總社地域における地形の形成と土地利用」『地域考古学』1号 地域考古学研究会
吉田英嗣 2004 「浅間火山を起源とする泥流堆植物とその関東平野北西部の地形発達に与えた影響」『地理学評論』77-8
下司信夫 2013 詳細火山データ集:「榛名火山」 日本の火山 産総研地質調査総合センター



Fig. 2 遺跡位置図 (国土地理院発行『前橋』『高崎』50,000分の1図を縮小・改変)

2. 歴史的環境

江田村西遺跡では、平成19年に宅地開発に伴う調査が実施されており、現況水田直下において古墳時代中期の住居跡1軒が確認されたほか、包含層中からは古墳時代前期の土器が多数出土している。弥生時代中期の土器も出土しているようであり、磨滅が著しいためHr-FA泥流によって運ばれたものと推測されている。

本遺跡から染谷川を挟んで300mの位置にある江田鏡神社(12)は「上野国神名帳」に見え、平安末期以前の創建と推測されている。奈良県田原本町の鏡作神社と同じ石凝姥命が祀られ、駿路沿いや元総社町一帯の國府推定域周辺では八稟鏡等の出土例も多く(笠原2008)、注目したい。本遺跡の北西には推定東山道駅路(国府ルート)が比定されており、駅路の支線といわれる日高道は本遺跡の西200m付近を南北に走行する。両古代道路に挟まれるようにして、染谷川と正觀寺川の中間に位置する微高地上には、大集落とともに神殿構造や工房跡が発見された鳥羽遺跡(4)、古代集落と金尾城の一部が調査された中尾遺跡(9・10)が広がる。この微高地を南へ下ると、国史跡日高遺跡(20)に到達する。日高遺跡では弥生時代後期後半から環濠集落と周溝墓群が営まれ、古墳前期に継続する。谷部にはAs-C下水田が広がる。As-B下水田においては本遺跡付近まで調査されて条里坪地割の復原に成功しており(日高条里)、1章Fig. 1ではその成果を援用した。滝川左岸際に位置する箱田古市前I・II遺跡(13)では、古代集落・Hr-FA下水田およびAs-C混晶・As-C混水田が重層的に調査され、中小河川の河岸と河川敷がテラス降灰・泥流堆積・乾燥化を経ながら、低地水田域から微高地集落域へと変動する様を見せる。中世では、高崎市中尾・日高・菅谷町一帯にかけて金尾城(16)・中尾城(19)・菅谷城(2)などの平城や環濠屋敷跡が集中し、地域開発の拠点であるとともに、箕輪長野氏の勢力範囲でもある。本遺跡の真北2.0kmには總社長尾氏の居城である蒼海城があり、境界や要害としての染谷川の意義が浮かび上がる。

概略すると、日高遺跡・正觀寺遺跡群(14)・新保田中村前遺跡(35)等で弥生後期以降に積極的な低地開発と集落造営が行われるが、古墳時代前中期の拠点的集落は近隣に見いだせず。継続的発展性に乏しい。対照的に律令期には國府・國分寺造営に伴って大規模集落が出現し、9世紀以降は菅谷・村東遺跡(2)のような低地開発集落が各地に現れる。中世にも低地域の城館・屋敷造営が活発で、その広がりは本遺跡にも及んでいる。



- 【○】弥生時代集落 ●古墳時代～古代の集落 △古墳時代～古代の水田 ■弥生時代～古代の包蔵地 □中世以降の城館・屋敷跡
 1a. 江田村西遺跡 No. 2 1b. 江田村西遺跡 2. 菅谷・村東道路、菅谷城 3. 稲荷台北金尾III遺跡 4. 鳥羽遺跡 5. 早坂A・B道路
 6. 菅谷高畑遺跡群 7. 高貝戸遺跡 8. 菅谷道路 9. 中尾遺跡 10. 中尾道路(開通道) 11. 吹笛道路 12. 江田鏡神社 13. 箱田古市前I・II遺跡
 14. 正觀寺遺跡群 15. 正觀寺遺跡群(縄文時代後晩石住居跡) 16. 金砂城 17. 中尾城之先遺跡 18. 黒崎屋敷 19. 中尾城 20. 日高遺跡(群)
 21. 中尾村東館 22. 原環濠遺跡 23. 上日高遺跡 24. 滝谷道路 25. 小八木井屋敷 26. 中尾村前道路 27. 日高中郷遺跡
 28. 江田下り柳道路 29. 箱田道下遺跡 30. 村前道路 31. 五反田遺跡 32. 箱田山道遺跡 33. 赤鳥道路 34. 村東館 35. 新保田中村前道路

Fig. 3 周辺の遺跡(国土地理院発行『前橋』25,000分の1図を改変)

IV 標準堆積土層

本遺跡の調査前現況は、南北に細長い島状微高地の畠地であり、東西には水田が広がる。夏季に試掘調査を行なった際には、住居跡床面付近で湧水が発生していたようである。基盤層は総社砂層（X層）で、住居跡主柱穴の壁面において観察すると、最上部の明褐色シルト以下は細粒～粗粒シルトと極細砂などが互層を成している。まれに拳大以下の礫と軽石を含み、軽石は角閃石を明瞭に内包する。IX層は漸移層に該当し、VIII層はAs-Cより下位のいわゆる黒ボク土で、黒色～暗褐色を呈してやや粘性を帯びる。VII～X層から、遺物は出土しなかった。VII層はAs-C混黑色土であるが、C輕石の角が取れること、古墳時代前期の土器小片を全体的に多数含有していること、V層上面において歓間の溝（サク）と考えられる畠跡（4号畠など）が検出されたことから、基本的には畠地耕作や遺構重複掘削に伴って形成された人為的土壤であると推察する。

H-4号住居跡覆土上部の中央窪地には、黄褐色のHr-FA泥流と灰褐色のシルト質褐色土が堆積していたが、遺構内の局部現象であるため、基本層序には含めていない。VI層は微量のHr-FAと多量のAs-Cを含む褐色土で、わずかに粘性を帯びる。V層はHr-FAを微量に含む褐灰色粘質土で、古代の洪水層あるいは水田耕作に起因する土壤と推測しており、W-4号溝の覆土はV層を基材としている。IV層はAs-Bを含む砂質土で、調査区南半部では削平されている。逆にIII層は南半部で厚く確認されたAs-A混土である。II層は鉄分の沈着によって明赤褐色を呈するシルト質As-A混土で、表土耕作土の1層が、かつては水田土壤でもあったことを示している。

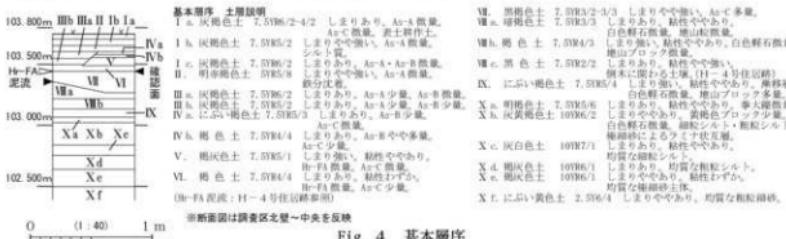


Fig. 4 基本層序

V 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

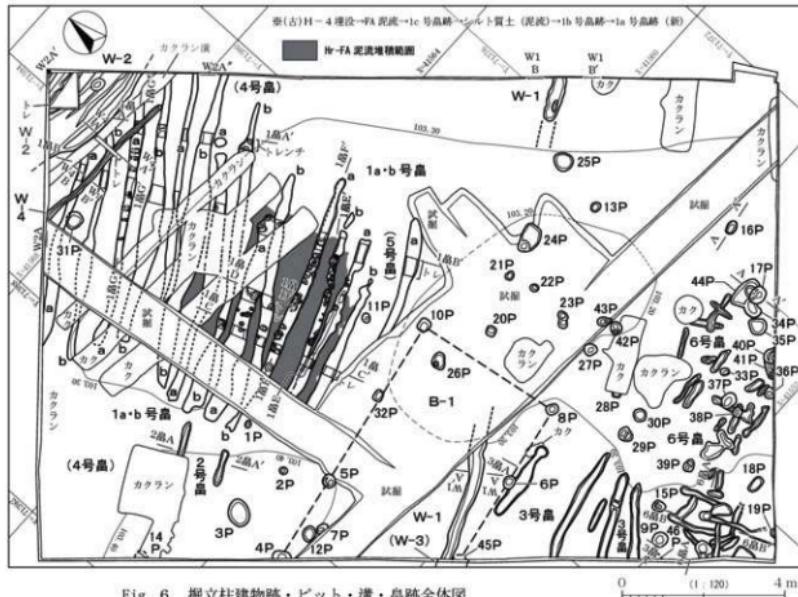
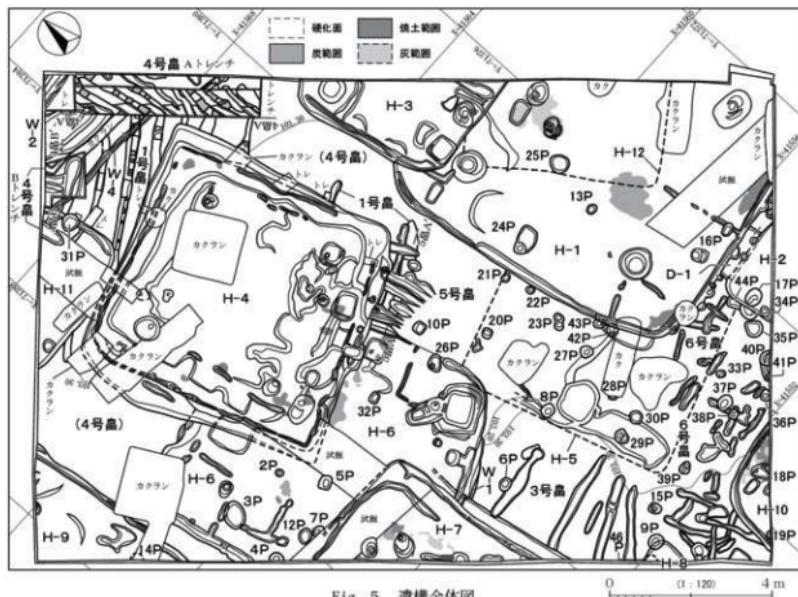
江田村西遺跡No.2では、古墳時代の住居跡12軒（推定前期11・中期1）と土坑1基、古墳時代の畠跡6ヶ所、古墳時代～古代のピット30基、古代末期～中世の溝1条、中世以降の掘立柱建物跡1棟およびピット16基、中世以降の溝1条、近世以降の溝1条を確認した。住居跡は重複事例と竪穴・床面・主柱穴の更新や拡張を伴う建替事例が多い。各遺構の諸属性は遺構一覧表（Tab.1）に示した。本節では遺構種別ごとに概説する。

竪穴住居跡（古墳時代前期～中期）

H-1号住居跡：長軸8.3mを測る大型住居である。S字彫B類とD類の小片（未掲載）が床面から出土した。炉2・3は内外の黒灰が踏み締められていた。炉3直下の掘り方面で古い火床面（炉4）を検出し、旧竪穴の炉と推測する。最新の炉1では南縁に枕石状粘土塊が設置され、火床面の赤化も顕著である。主柱穴3基、間仕切溝5条を確認した。南壁際に出入口ピット（P4）があり、D-1号土坑は出入口関連施設と推測する。竪穴南壁には壁柱穴状小ピットが連なる。竪穴壁際覆土下層に焼土層があり、上屋焼失を示す。南東隅一帯の溝状掘り方は竪穴壁よりも内側を巡り、拡張を示す。掘り方で検出した北西隅のP5は柱穴形状ながら、旧貯蔵穴かもしれない。

H-12号住居跡：H-1号住居跡の掘り方面で確認し、西壁竪穴痕跡と、主柱穴2基、貯蔵穴を確認した。復原すると、東西6m×南北4.7mの横長隅丸長方形を呈する竪穴と推測され、主柱穴配置はかなり内寄りとなる。

H-2号住居跡：竪穴の北西隅のみ確認し、古墳時代前期と推測する。竪穴は浅く、壁柱穴4基を確認した。



H-5号住居跡：L字状の溝状掘り方のみが残存し、円形床下土坑2基を伴う。H-1号住居跡よりも古い。

H-3号住居跡：H-1号住居跡を破壊した部分は貼床を施すが、全体に硬化した地床である。出入口ピットの北・東側は高まりとなり、南西隅と北西隅に周堤を伴う貯蔵穴が設置される。貯蔵穴1底面には直口壺が遺棄され、前期後葉に比定される。西側豎穴壁と周溝との間の幅数cmのテラス部分は貼壁用空間と判断した。

H-4号住居跡：中期初頭に比定される。豎穴は一辺約6m程度の正方形で、北西隅と南東隅は隅丸状である。豎穴外周には浅いテラスが巡る。豎穴内の壁際には貼床を伴う棚状施設がほぼ全周し、床面からの高さ10~15cm、幅は15~25cmを測る。南壁中央は深い出入口ピット(P12)を伴ってわずかに張り出す。壁際の覆土下層には炭化材と焼土が点在し、埋没初期での上屋焼失と推測され、その後に複数の個体へ半個体土器が廃棄されたらしい。主柱穴4基は空洞化した柱材痕跡を伴い、柱材の一部は黒色(表面淡橙色)の粘土に置換されていた。柱痕直径は10~14cmで、円形~楕円形の断面形を呈する。貯蔵穴の北側には硬化周堤を伴う小ピット2基(P6+13)がある。P6には破碎された土器小片が充填され、2基は古い豎穴に伴う出入口ピットの可能性が高い。掘り方面では周溝が2重に巡り、豎穴拡張に伴って棚状施設を構築したものと推定する。本豎穴では埋没最終過程の窪地に、黄褐色のHr-FA泥流が10cm程度の厚さで堆積する。泥流被災後には1c号畠跡を掘削しているが、さらに灰褐色シルト質土に被覆され、その上から1a・1b号畠跡が耕起される。

H-6号住居跡：長軸7m程度の大型住居で、H-4・7号住居跡より古い。覆土下層～床面に焼土が点在し、上屋焼失であろう。炉1は貯蔵穴覆土に沈み込んだ焼土を馬蹄形状に検出し、豎穴廃絶後の遺構である。豎穴西・東側に間仕切溝を6条設ける。主柱穴P1は空洞柱痕で、P2はH-4掘り方面で確認した。底面が階段状となるP3は貯蔵穴と重複し、根固め土が貯蔵穴北壁を形成する。P4はH-7のP1と重複し、掘り方面で検出した。南壁際のP5・6は新旧出入口ピットで、豎穴より一回り小さな溝状掘り方も認められ、豎穴拡張を想定する。

H-7号住居跡：豎穴北東部のみを調査した。近接位置に新旧主柱穴が2基あり、P2では柱材抜取面に貼りつく状態で落状炭化物を検出した。イネ科と思われる茎が縦横に編み込まれたような形状を呈している。P1底面付近からは略円形の高环が出土し、埋納行為であろう。周溝も2重に巡り、豎穴の拡張を想定する。豎穴東壁外縁には幅15~20cm程度のテラス(棚)を伴う。豎穴覆土下層に焼土や黒灰が点在し、上屋焼失と推定する。

H-8号住居跡：豎穴北東隅端部のみを調査し、深度は10cm程度と浅い。遺物は僅ながら、古墳前期であろう。

H-9号住居跡：新旧の床面があり、旧床を5~10cmほど嵩上げして新床を形成する。新旧ともに細い周溝があり、新豎穴は周溝部分だけ拡張する。北半は旧床面で調査を終え、南半は掘り方面まで調査した。

H-10号住居跡：新旧の床面があり、旧床(H-10b)の上に厚さ20~30cmの盛土・貼床を施して新床(H-10a)を形成し、豎穴は周溝部分のみを拡張する。新豎穴は焼失後に地山ブロックを含む土で埋め戻される。

H-11号住居跡：試掘で大半が破壊される。VII層を地床とし、覆土はVII層に近い。南壁際に出入口ピット1基を確認した。南東隅壁際からS字彫の口縁部破片が出土した。地床面には4号畠跡の歓間も検出されている。

古墳時代の畠跡(サク・歓間遺構)

※1a・1b号畠跡と4号畠跡はプラン確認を重視したトレンド調査。

1~3号畠跡：Hr-FA降下以降のFA混畠跡。H-4号住居跡覆土上部がFA泥流に被覆され、おそらく硬化後に1c号畠跡が耕起されるが、再びシルト質土に覆われ、次に同住居を含む広範囲に1b畠→1a畠の順に耕起される。1a~1c号畠跡および2号畠跡は一連の畠跡と認識した。3号畠跡は新旧の歓間5条で構成される。

4~6号畠跡：As-C降下以降のC混畠跡で、覆土は基本層序VII層にほぼ相当する。4号畠跡の歓間は密集し、南北3時期、東西1~2時期の耕作痕跡と推定する。覆土を全掘したBトレンドでは凹凸が非常に著しく、連續的・長期的な耕作と推測される。覆土中およびVII層からは土器小片・細片が多數出土した。5号畠跡は南北方向に密集した歓間群である。6号畠跡は、不規則ながら重複歓間群と判断し、主軸はおよそ4方向認められる。

溝・掘立柱建物跡・ピット・遺構外出土遺物

W-1号溝：調査区中央を横断する浅い溝で、東北東~西北西を指向し、覆土は砂質B混土である。(→20頁)

Tab. 1 遺構一覧表 懸穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・島跡・ピット

野穴住居跡一観表（単位：m）

造形名	平面形	主軸方位	長軸×短軸、深さ	仰	軒端穴	造物	所見	時期・備考
H-1 五住居形	丸角正方形	N-11°-W	8.36 × (5.29), 0.22	4.1 底、1.0 （断面）方面	不明	丸底、小切型、S字 底、土器足、扇面石	人型住居。土柱九段りの穴型柱と半軸に 間仕切柱。壁際穴は「く」字形。	古墳時代 中期後葉、他处 （吉野郡南）
H-2 五住居形	丸角正方形	N-10°-W	(2.19) × (0.49), 0.13	不明	不明	土器脚少量	小柱状土器、床跡は「く」字形。	（吉野郡南）
H-3 三住居形	丸角正方形	N-9°-W	4.36 × (3.25), 0.24	不明	不明	扇面石、直口盆 （テラス）	軒端穴は方型と圓形の2種で横開け。土 器脚は「く」字形。	古墳時代 前期後葉
H-4 4住居形	略正方形	N-17°-W	(6.65) × 6.52 (6.5) × 6.2, 0.37	不明	不明	南面扇 （中央部） 北面、土器脚、 瓦砾、扇面石	小直径圓孔、直面 扇形が「く」字形。 豎穴式部屋に埋め置 き。出入り口（「く」字形）は「く」字 溝より入る。土柱は全土器脚埋め置き。	古墳時代 中期後葉
H-5 5住居形	丸角正方形	N-17°-W	(5.62) × (4.49), 0.16	不明	不明	土器脚少量	（土下石）土器脚と扇形柱跡のみの遺存。	（吉野郡南）
H-6 6住居形	丸角正方形	N-14°-W	7.43 × 6.83, 0.22	不明、H 4 底、瓦砾	不明	南面扇 （中央部） 瓦砾	豎穴式部屋 北西隅、土器脚は扇形柱跡、北東 南東土柱は研磨土柱。壁際穴に土器脚埋 め置き。	古墳時代 中期後葉、他处 （吉野郡南）
H-7 7住居形	丸角正方形	N-11°-W	(5.35) × (3.01), 0.26	不明	不明	高周、S字型	東壁裏側瓦砾層。 新旧廻柱は北東土柱化し 柱穴、P柱に高周柱跡、P柱から土器脚埋 め置き。	古墳時代前期 中期後葉
H-8 8住居形	丸角正方形	N-0°	0.89 × 0.77, 0.13	不明	不明	土器脚僅少	豎穴式部屋の構造。 「く」字形。	（吉野郡南）
H-9 9住居形	丸角正方形	N-5°-W	(4.70) × (2.26), 0.28	不明	不明	S字型、土器脚	濃闊2面、新旧廻柱。豎穴式部屋が2 面の可逆性あり。住居は底柱は3段以上。	古墳時代前期 中期後葉
H-10 9住居形	丸角正方形	N-0°	(2.20) × (0.99), 0.09 (2.04) × (0.99), 0.22	不明	不明	S字型、土器脚	豎穴式部屋を複数の「く」字形に変更し て新転換を形成。最終的に埋め込まれる。 床跡、埋め戻しは4号品、壁際穴に直口 土器口（「く」字形）。	古墳時代前期 中期後葉
H-11 10住居形	丸角正方形	N-13°-W	(3.63) × (2.18), 0.18	不明	不明	S字型、土器脚	（テラス）	古墳時代後葉
H-12 11住居形	丸角正方形	N-33°-E	(4.80) × (2.60), 0.09	不明	西面扇	S字型、土器脚	H-1号品より難観。土柱六ヶ所。	古墳時代前 期後葉

獨立柱建築物跡一覽表

遺傳構造	測定・形状	主軸方位	傾斜方向	空間面×面積	平均柱間	所見	時期・備考
B-1柱立柱跡跡	1間×3間 馬蹄形	N-80°-E	東西棟	3.76 × 6.70	約4m	柱穴7箇(4~6・8・10・32・45P)で構成。奥間約14.4mも満ながら、行間柱間の最も大きいは2.5mを測る。圓頂式の4Pの本來深度は80cm。	中世。遺構外の骨蔵室。 准帝塔は圓頂造物か。
土坑一蓋表	単位:m						

Page 1

溝一覧表 単位:m		測量条件				測量結果		時期・備考	
測線号	走行方位	断面形	上端幅×下端幅、深さ	標高	測定	流物	測定	測定	測定
W-1 号線	N-64°-E	浅状区	0.52 × 0.25 × 0.17 ~ 0.64, 0.19 ~ 0.06	砂質 A+B 土壌	土壌器皿僅少	調査区を東西に横断する浅い溝。鉢詰法では中央部洪積、東側で最も新しい。	中段以降 A+B 下層面	見残す	見残す
W-2 号線	N-84°-W	逆蛇形～U字状	(1.25) × 0.39, 0.56 ~ 0.24	シルト質～砂質の A+B 土壌	土壌器皿少量	埋没し、削除により底面用。最古の深部は断 面逆蛇形で、底面に A+B 2 次混積層。	古代末期 ～中世	見残す	見残す
W-3 逆溝	—	逆蛇形(断面)	1.00 × 0.28, 0.06	A+B 土壌	なし	調査区西端でのみ確認、W-1 の直上にあたる。 近年以降	見残す	見残す	見残す
W-4 号線	N-98°-W	U字状	0.19 ~ 10.0 × 0.06 ~ 0.03,	地形に依存した鶴 灰色粘土～A+B 土壌	土壌器皿僅少	粗い傾斜。本流の流域に現代堆積が、その 北にW-2 までの土壠とし、その勢の左方に堆積する。	現れなく 北にW-2 までの土壠とし、その勢の左方に堆積する。	見残す	見残す

基础一览表 单位：m

ピット一覧表 場合：③

No.	平面形	長径×短徑	深さ	時期・所見
1 P	楕円形	19 × 15	25	中世時代、B面
2 P	楕円形	20 × 18	7	中世時代、B面
3 P	楕円形	68 × 52	21	中世時代、B面
4 P	円形孔	36 × 20	46	中世、B-1
5 P	楕円孔方形	25 × 30	42	中世、B-1
6 P	楕円形	34 × 27	33	中世、B-1
7 P	楕円形孔	<32 × 17	20	中世時代、B面
8 P	楕円孔方形	34 × 30	12	中世、B-1
9 P	楕円形	39 × 35	2	中世時代、B面
10 P	楕円孔方形	30 × 29	20	中世、B-1
11 P	楕円形	22 × 21	22	中世時代、B面
12 P	楕円形	40 × 31	11	中世時代、B面
13 P	楕円形	26 × 22	9	近世、E面
14 P	円形孔	<31 × ?	21	H-9を切る
15 P	方形	30 × 26	26	中世以降、B面
No.	平面形	長径×短徑	深さ	時期・所見
16 P	楕円形	55 × 23	11	古墳時代、C面
17 P	楕円形	45 × 36	21	古墳時代、C面
18 P	楕円形	44 × 24	10	古代、F-A面
19 P	円形孔	<25 × 11	6	古代、F-A面
20 P	方形	25 × 24	28	古墳時代、C面
21 P	楕円形	24 × 19	12	古墳時代、C面
22 P	円形孔	20 × 19	3	古墳時代、C面
23 P	不整形	43 × 25	15	古墳時代、C面
24 P	楕円形	73 × 68	13	古墳時代、C面
25 P	楕円形	49 × 45	6	古墳時代、C面
26 P	楕円形	41 × 33	14	古墳時代、C面
27 P	楕円形	39 × 29	32	古墳時代、C面
28 P	不整形	<21 × 8	7	古墳時代、C面
29 P	不整形	37 × 34	18	古墳時代、C面
30 P	円形孔	35 × 32	9	古墳時代、C面
No.	平面形	長径×短徑	深さ	時期・所見
31 P	楕円形	44 × 40	24	古墳時代、C面
32 P	方舟	29 × 22	11	中世、B-1
33 P	楕円形	22 × 18	19	古墳時代、C面
34 P	楕円孔円形	48 × 25	12	古墳時代、C面
35 P	楕円形	46 × 43	7	古墳時代、C面
36 P	円形孔	<29 × 21	14	古墳時代、C面
37 P	楕円形	42 × 33	17	古墳時代、C面
38 P	方形	24 × 22	18	古墳時代、C面
39 P	楕円形	33 × 25	13	古墳時代、C面
40 P	楕円孔円形	<36 × 25	20	古墳時代、C面
41 P	円形孔	<(15 × 9)	15	古墳時代、C面
42 P	楕円形	31 × 28	22	古墳時代、C面
43 P	不整形	36 × 22	19	古墳時代、C面
44 P	楕円孔円形	(83 × 44)	29	古墳時代、C面
45 P	-	<(33 × 9)	(24)	中世、B-1
46 P	-	<(25 × 9)	(20)	中世、B-1

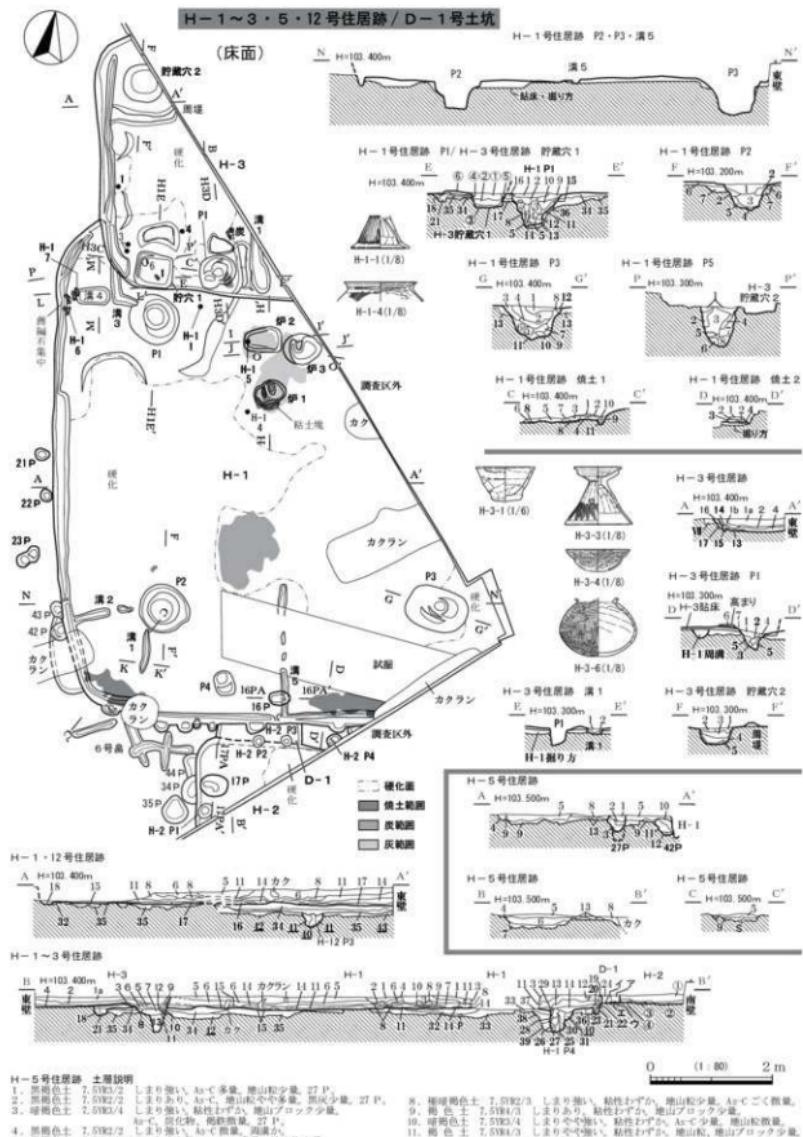


Fig. 7 H-1~3·5·12号住居跡/D-1号土坑(1)

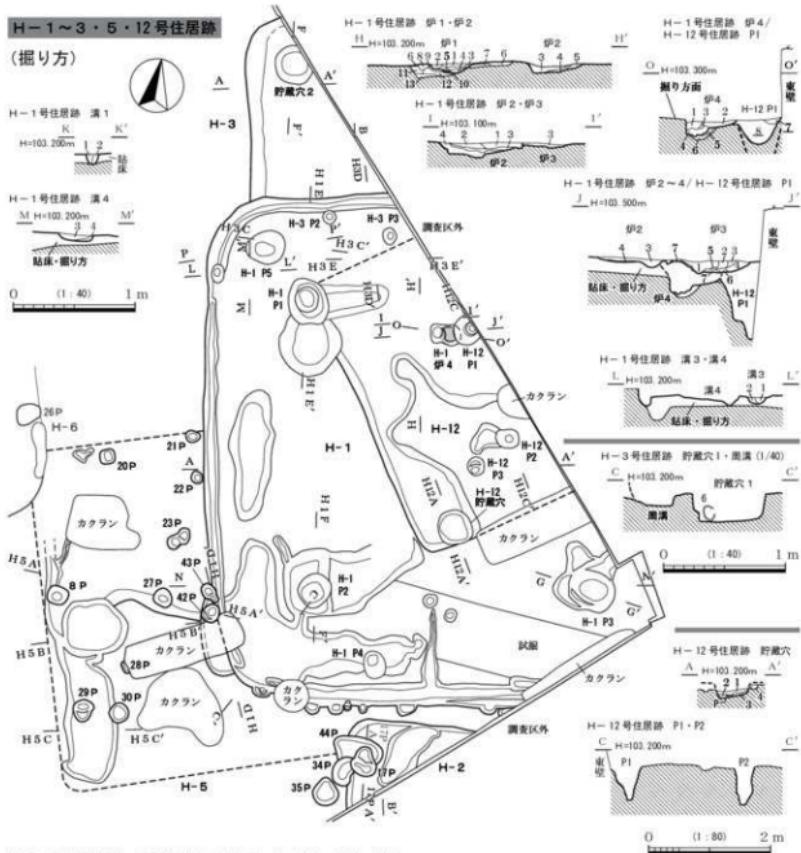


Fig. 8 H-1~3·5·12号住居跡 / D-1号土坑 (2)

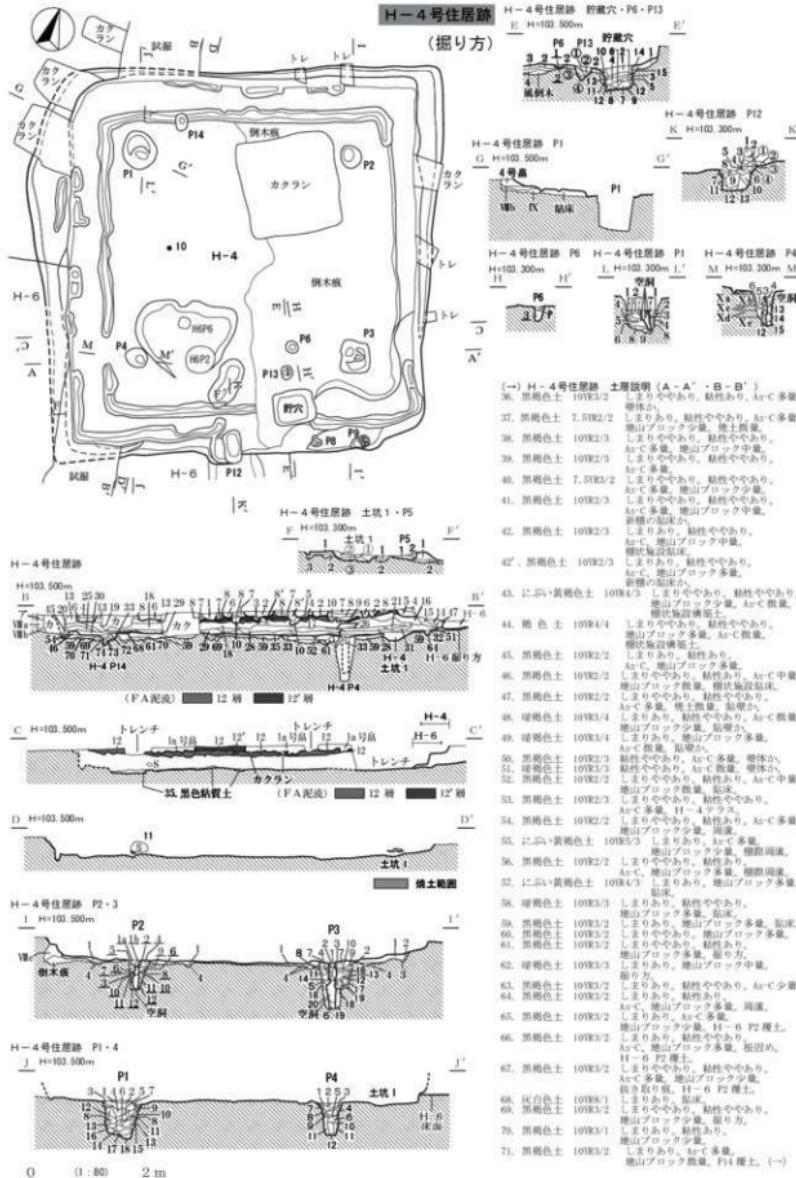


Fig. 10 H-4号住居跡（2）

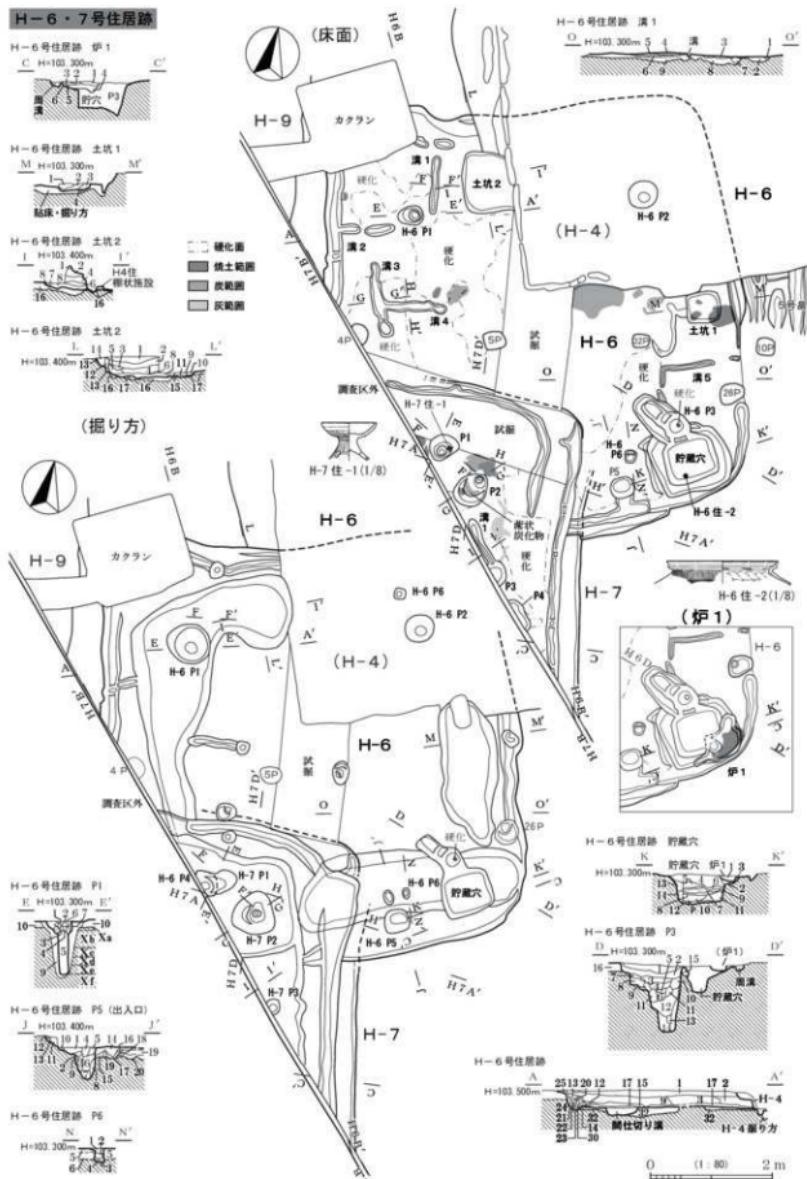
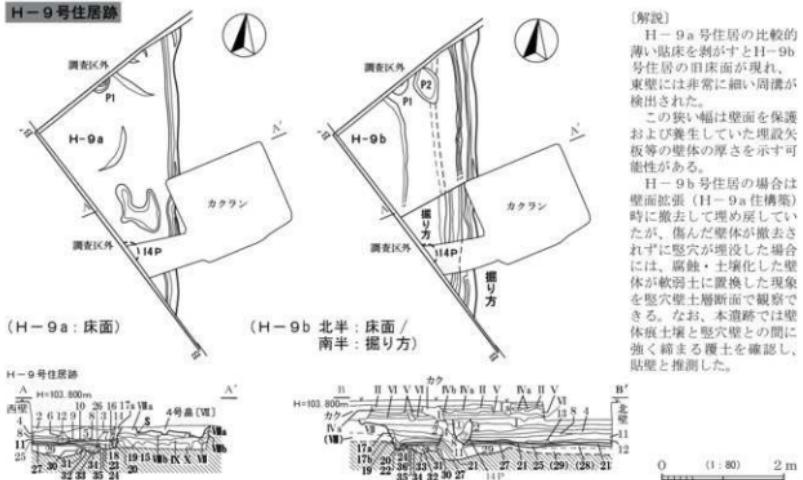


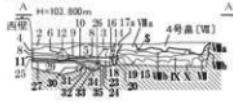
Fig. 11 H-6·7号住居跡(1)

- H-10号住居跡 - 19 P 土壌試験 (A-A'・B-B')
1. 黒色土 7.5M3/2 しまりやや弱い。粘性わずか。地山シルトや多量。Ar-C 少量。
 2. 黒色土 7.5M3/4-6 しまりやや強め。粘性わずか。地山ブロック多量。
 3. 増鶴色土 7.5M3/4 しまりやや強め。粘性わずか。Ar-C やや多量。地山ブロック多量。地山シルト少量。地山少量。
 4. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや弱い。粘性わずか。地山シルト少量。地山少量。
 5. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや強め。粘性わずか。Ar-C 多量。地山シルト少量。
 6. 黒色土 7.5M3/2 しまりやや弱い。粘性わずか。Ar-C 多量。地山シルト少量。地山ブロック多量。
 7. 黒褐色土 7.5M3/2 しまりやや弱い。粘性わずか。Ar-C やや多量。均質。
 8. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやややややや。黑色多量。Ar-C 粘土少量。
 9. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや弱い。黑色少量。地土粘土少量。
 10. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや。Ar-C 少量。地山シルト少量。P1。
 11. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。地山シルト少量。地山ブロック多量。
 12. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 13. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 14. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや弱い。粘性わずか。Ar-C 粘土。地山シルト少量。
 15. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや多量。均質。
 16. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 17. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C なし。均質。地山。
 18. 增鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 19. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。地山粘土量。地山シルト少量。
 20. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。地山シルト少量。
 21. 明褐色土 7.5M3/6-5m しまりやややや。地山化。Ar-C 粘土。
- H-9号住居跡 - 19 P 土壌試験 (A-A'・B-B')
1. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやや弱い。粘性わずか。Ar-C 粘土。地山シルト少量。
 2. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 3. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 4. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 5. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 6. 増鶴色土 7.5M3/2 しまりやややや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 7. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 8. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 9. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 10. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 11. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 12. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 13. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 14. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 15. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 16. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 17. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 18. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 19. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 20. 黑褐色土 7.5M3/2 しまりやや。粘性わずか。Ar-C やや少量。均質。
 21. 明褐色土 7.5M3/6-5m しまりやややや。地山化。Ar-C 粘土。

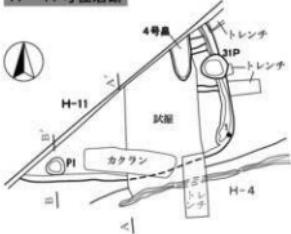
H-9号住居跡



H-9号住居跡



H-11号住居跡



H-11号住居跡 土層説明 (A - A')

1. 墓原樹木土 7.5mE/3 しまりあり。Ar-C 多量。
2. 黒褐色土 7.5mE/2 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 微量。
3. 褐色土 7.5mE/1 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 微量 (Ar-FA 微量)。
4. 墓原樹木土 7.5mE/3 しまりやや強い。粘性土で少々、Ar-C 多量。4号竪溝土 Ar-C 芸量。

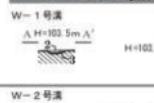
5. 墓原樹木土 7.5mE/3 しまりやや強い。粘性土で少々、Ar-C 多量。
6. 黑褐色土 7.5mE/2 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 多量。
7. 黑褐色土 7.5mE/2-3 しまりやや強い。粘性土で少々、Ar-C 多量。
8. 黑褐色土 7.5mE/2 しまりやや強い。粘性土で少々、Ar-C 多量。

0 (1:80) 2 m 0 (1:40) 1 m

16P・17P



W-1・2・4号溝



W-4号溝 (1/40)



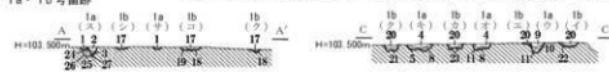
H-11号住居跡 PI



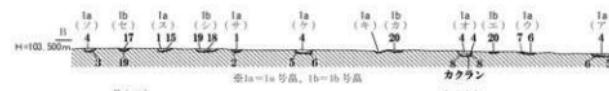
1~6号竪跡

※柱立柱建物跡・ピット・溝・竪跡の平面図は Fig. 5・6 全体図参照。

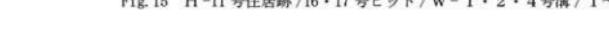
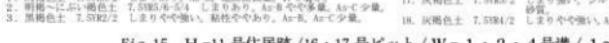
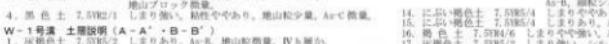
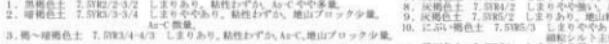
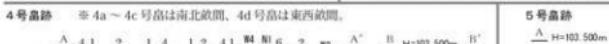
1a・1b号竪跡



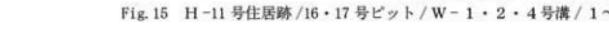
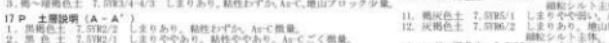
※1a=1a号竪。1b=1b号竪



※1a=1a号竪。1b=1b号竪



4号竪跡 ※ 4a～4c号竪は南北範囲、4d号竪は東西範囲。



0 (1:80) 2 m

W-2号溝 土層説明 (A - A')

1. 黒褐色土 7.5mE/2-3/2 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
2. 墓原樹木土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
3. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
4. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
5. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
6. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
7. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
8. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
9. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。
10. 黑褐色土 7.5mE/2-3/4 しまりあり。粘性土で少々、Ar-C 中や多量。

11. 黑褐色土 7.5mE/1 しまりやや強い。Ar-B, 墓山乾燥帶、細粒シルト土体。
12. 黑褐色土 7.5mE/2 しまりやや強い。Ar-B, 墓山乾燥帶、細粒シルト土体。
13. 黑褐色土 7.5mE/4 しまりやや強い。

14. 黑褐色土 7.5mE/4 しまりやや強い。Ar-B, 墓山乾燥帶、細粒シルト土体。
15. 黑褐色土 7.5mE/4 しまりやや強い。Ar-B, 墓山乾燥帶、細粒シルト土体。
16. 黑褐色土 7.5mE/4 しまりやや強い。Ar-B, 墓山乾燥帶、細粒シルト土体。
17. 黑褐色土 7.5mE/2 しまりやや強い。

18. 黑褐色土 7.5mE/2 しまりやや強い。Ar-B やや多量、Ar-C 微量。やや砂質。(-)

Fig. 15 H-11号住居跡 / 16・17号ピット / W-1・2・4号溝 / 1~6号竪跡

W-3号溝: W-1直上の調査区西壁でのみ確認したAs-A混覆土の浅い溝で、W-1が踏襲されたらしい。

W-2号溝：東西の推定条里坪地割（Fig.1）の南側に沿う用水路。同一地点を何度も掘り直すため複雑な平面形状となり、新しいほど浅い。最深部底面にAs-Bの2次堆積薄層があり、開削は古代末期に遡る可能性がある。

W-4号溝：W-2の南に隣接する。覆土はV層に近似した褐色粘質土で、推定条里地割とほぼ平行し、細いながらも用水路の可能性がある。畦畔や田面は未検出ながら、W-2の前駆体として評価することも可能である。

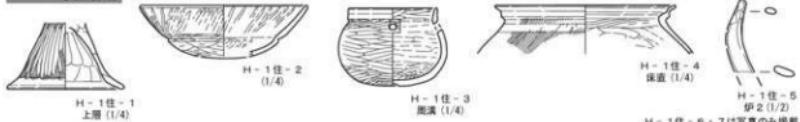
B-1号掘立柱建物跡: 中世と推定される梁間1間×桁行3間の側柱建物で、4~6・8・10・32Pで構成される。主軸方位は細長い微高地の主軸と近似し、地形を考慮した配置で、古墳前期の住居跡とも合致する。

ビット:46基のうち、B混覆土が16基(うち7基はB-1)、V層類似のFA混覆土が3基、C混覆土が27基である。調査区南西部のC混ビット群は、H-5号住居跡や6号墓跡に伴う可能性がある。

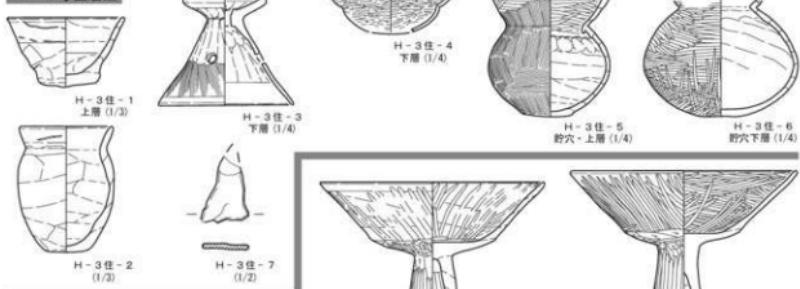
VI まとめ

今回の調査によって、江田村西遺跡が古墳時代前期～中期の住居跡が密集する、微高地上の拠点的集落である可能性が高まつた。おそらく周辺には周溝墓やAs-C降下前後の水田も存在するであろう。前回調査の成果から推せば、初期開発は弥生時代に遡る。弥生後期の日高遺跡を起点として、次世代の開発拠点が本遺跡のような細長い鳥状微高地（旧自然堤防）へと遷移していったものと予想する。重複する畠歛問群は定着度の高さを表しており、やがて水田開発が進行して地下水位が上昇し、FA泥流が被災した古墳後期以降は、主に富地へと転換したらしい。V層灰色粘土質土が遺跡地全体を被覆している状況は古代以降の洪水層堆積を示唆し、W-2・4号溝の存在は、少なくとも古代末期以降は条里区画に組み込まれていったことを表している。次に居住地化されるのは中世で、建物柱穴の深さ（最大80cm）は強固な軸組みと耐久性能の追求を示唆し、屋敷の存在を予想させる。

H-1号住居跡



H-3号住居跡



H-4号住居跡①

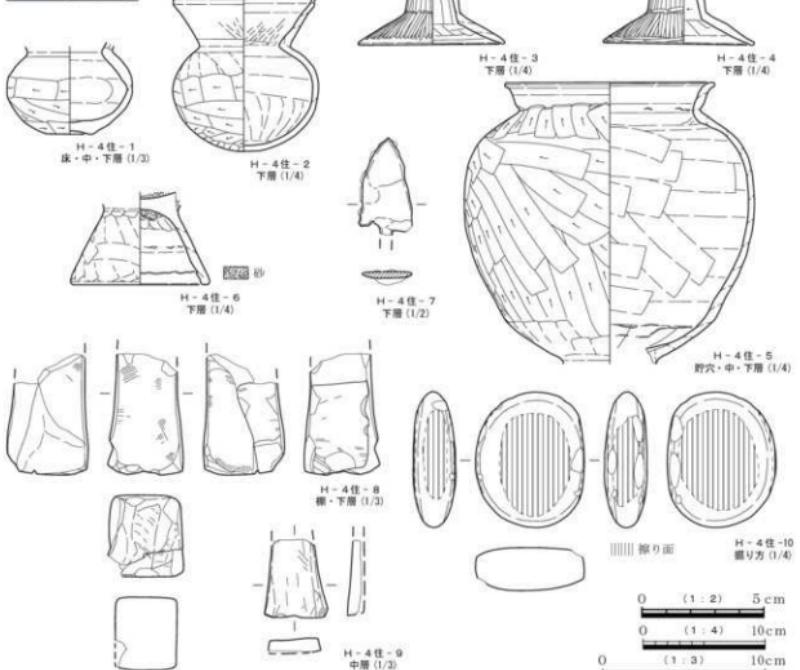
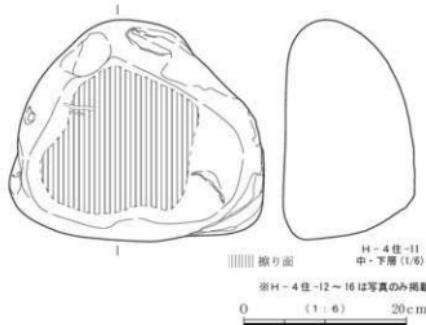


Fig.16 遺物図 (1) H-1・3号住居跡、H-4号住居跡①

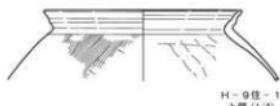
H-4号住居跡②



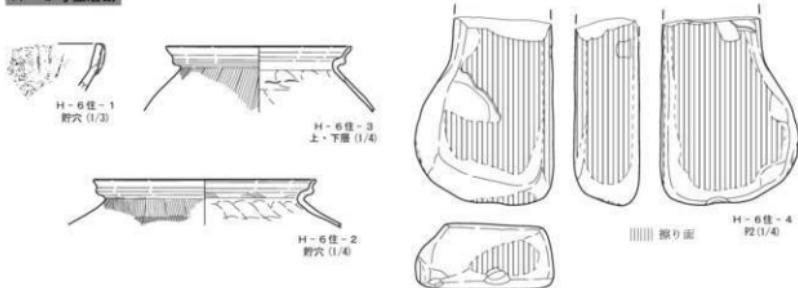
H-7号住居跡



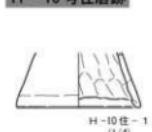
H-9号住居跡



H-6号住居跡



H-10号住居跡



H-11号住居跡



4号畠跡



遺構外出土遺物

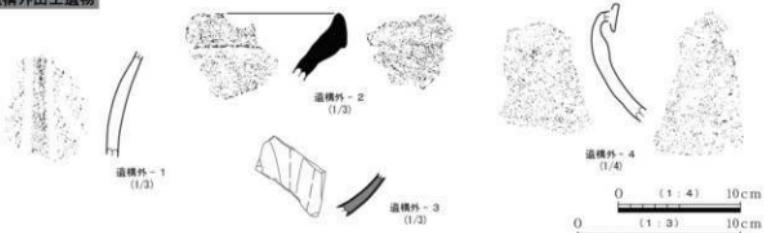


Fig. 17 遺物図 (2) H-4号住居跡②、H-6・7・9・10・11号住居跡、4号畠跡、遺構外出土遺物

Tab. 2 遺物観察表(1)

H-1号住居跡

番号	器種	法度(cm)	①構造 ②文様 ③新土 ④既存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 鉢	口径 - 器高<4> 脚端部径 9.4	①焼化粧 ②外：にぶい根 ③褐色のみ ④褐色のみ	粘土組み上げ。 外側：脚端部ヨコナード→脚部ハケ→ミガキ。 内面：脚端部ヨコナード。縫合ヨコナード。	No2 上層	
2	土師器 小形丸底鉢	口径 (13.6) 器高 (4.2) 底径 - 1/2	①焼化粧 ②外：黒褐 内：明赤褐 ③褐色松、白色松、石英、輝石 ④1/2	粘土組み上げ。 外側：口部底ミガキ。体部ケズリ。 内面：口部底ミガキ。	埋土一括	
3	土師器 小形鉢	口径 (7.6) 器高 6.4 底径 1.2	①焼化粧 ②内外：褐色 ③褐色松、白色松、片岩松 ④1/2	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード。体部下平ケズリ→ミガキ。 内面：口部底→底面ミガキ。	周廣	体部穿孔(焼成前)。
4	土師器 S字形 口縁垂	口径 (14.6) 器高<4.0> 底径 -	①焼化粧 ②外：褐色 ③褐色松、白色松、輝石 ④口縁部 1/2 瓦片	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード、胴底ハケ。 内面：口部底ヨコナード。縫合ハク。脚部ヘラナード。	No5 底流	口縫部→胴部外面 側付着。
番号	器種	法度(cm・g)	①構造 ②文様 ③新土 ④既存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
5	土製品	長 3 (1.1)	膨大幅 0.7 厚さ 0.3 重量 0.9 破片 略扁平状の形状。半厚ね成形。黄土色ナチュラル。		No16 9.2	
6	石製品 断面石	長 14.4 幅 5.2 厚さ 4.6 重量 44.0 肩円石安山岩 宽肩断面風丸長方形状の焼付の川原石。		No11 底流		
7	石製品 断面石	長 14.8 幅 7.2 厚さ 4.3 重量 615.98 破片 瓦状瓦形の焼付の川原石。表面は磨擦顕著。		No12 底流	片側に自然削れあり。	

H-3号住居跡

番号	器種	法度(cm)	①構造 ②文様 ③新土 ④既存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 小形环	口径 7.0 器高 4.3 底径 3.5	①焼化粧 ②外：にびい根 内：黒褐 ③褐色松、白色松、石英、輝石 ④完全 既存	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード。体部→底面ナード。 内面：口部底→底面ヨコナード。底面ナード。	No1 上層	外面に黒斑。
2	土師器 ミニチュア	口径 6.6 器高 7.8 底径 (2.4)	①焼化粧 ②外：黒褐 内：灰褐 ③褐色松、白色松、石英、輝石 ④1/2 瓦	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード、胴部ケズリ→棒なナード。 内面：口部底ヨコナード。脚部ヘラナード。脚部ナード。	埋土一括	外面に黒斑。
3	土師器 器台	口径 7.6 器高 9.5 脚端部径 11.0	①焼化粧 ②内外：にびい根色 ③褐色松、白色松、石英、輝石 ④瓦6	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード、器台部ハケ→ヘラナード。 脚部ハケ→半ナード。脚端部ヨコナード。 内面：口部底ヨコナード。器台部ヘラナード。脚部ナード。	No3 下層 No4 下層	内外面黒斑。 脚部凹孔3ヶ所。
4	土師器 小形丸底鉢	口径 10.4 器高 (6.6) 底径 - 1/2 瓦部 3/4	①焼化粧 ②外：褐色 ③褐色松、白色松、石英 ④瓦6	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード→ミガキ。脚部ケズリ→ミガキ。 内面：口部底ヨコナード→ミガキ。底面ミガキ。	No2 下層	
5	土師器 小形直口壺	口径 9.6 器高 10.4 底径 4.0	①焼化粧 ②外：にびい根色 ③褐色松、白色松、石英 ④3/4	粘土組み上げ。 外側：口部底ハケ→上半ミガキ。胴部ハケ、底部ナード。 内面：口部底ミガキ。胴部→底部ミナード。	No1 上層 No2 上層 既穴	
6	土師器 小形直口壺	口径 - 器高 (7.6) 底径 2.5	①焼化粧のみ	粘土組み上げ。 外側：脚部ヨコナード。脚部上ハケ、下半ケズリ→ミガキ。 底部ミガキ。 内面：脚部ミガキ。脚部→底部ナード。	No6 既穴下層	外面に黒斑。
番号	器種	法度(cm・g)	①構造 ②文様 ③新土 ④既存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
7	陶製品	長 5 (2.7)	膨大幅 1.9 厚さ 0.2 重量 1.05 破片/枚状先端部へ尖端部欠損。		埋土一括	

H-4号住居跡(1)

番号	器種	法度(cm)	①構造 ②文様 ③新土 ④既存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 小形環口壺	口径 - 器高 (6.6) 底径 2.8	①焼化粧 ②外：にびい根色 ③褐色松、白色松、石英、輝石 ④必須部 3/4	粘土組み上げ。 外側：口部ヨコナード、体部ナード→半ケズリ。底部ナード。 内面：口部ヨコナード。体部上ナード。下半コピナード。	中層 下層	
2	土師器 直口壺	口径 (12.4) 器高 13.7 底径 -	①焼化粧 ②外：褐色 ③褐色松、石英、角閃石、輝石 ④1/2 瓦部 2/3 残	粘土組み上げ。 外側：口部底不規則。頭部ミガキか。 体部ナード→半ケズリ。 内面：口部底不規則。頭部ミガキか。 脚部ミナード。	No10 下層	内外面被熱。 体部外面黒斑。
3	土師器 直口壺	口径 18.2 器高 15.5 脚端部径 12.0	①焼化粧 ②外：褐色 ③褐色松、白色松、石英、輝石 ④ 4/5	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード、口部→脚部ヘラナード→ミガキ。 脚部ヨコナードケズリ→ミガキ。脚端部ヘラナード→ミガキ。 内面：口部底ヨコナード。口部→脚部ヘラナード→ミガキ。脚端部ヘラナード。	No1 下層 No2 下層	外面に黒斑。
4	土師器 直口壺	口径 (18.4) 器高 16.4 脚端部径 12.4	①焼化粧 ②外：明赤 ③褐色松、白色松、石英、角閃石 ④ 1/2	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナードミガキ。坪部→脚柱部ケズリ→ミガキ。脚柱部ヘラナード。 内面：口部底ヨコナードミガキ。 脚柱部ヘラナード。	No29 下層	脚端部内面被熱。
5	土師器 直口壺	口径 17.0 器高 (23.0) 脚端部径 3/4	①焼化粧 ②外：にびい 黄褐 内：灰褐 ③褐色松、白色松、石英、輝石、角閃石	粘土組み上げ。 外側：口部底ヨコナード、胴底ハケ→ミガキ。 内面：口部底ヨコナード。胴底ヘラナード。	No5 中層 No7 中層 既穴	脚部内面被熱付着。 既穴。
6	土師器 口縁付甕	口径 - 器高 (7.5) 台端部径 11.0	①焼化粧 ②外：にびい 黄褐 内：灰褐 ③褐色松、輝石 ④ 1/2	粘土組み上げ。 外側：口部底ミガキ。底部ナード→砂拂で付け。 内面：口部ナード。底部ナード砂拂で付け。	No26 下層	
番号	器種	法度(cm・g)	①構造 ②文様 ③新土 ④既存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
7	陶製品 鉢	長 4 (0.3) 最大幅 2.2 最大厚 0.2 重量 4.33 実測灰根/鉢底。			No1 下層	平底系か。
8	石製品 柱状石	長 4 (2.4) 最大幅 4.7 最大厚 0.6 重量 14.07 瓦状瓦 1/2 残存 2/4 瓦片付加。表面由来はよく被れしており、錆状の剥離がわざかに見られる。			No11 下層 埋土上	一部に煤付着。
9	石製品 柱状石	長 4 (4.8) 最大幅 3.9 最大厚 0.9 重量 19.66 瓦状瓦 破片/2枚付加。残存する3/4はよく被れれている。			中層	
10	石製品 磨石	長 11.1 最大幅 8.9 最大厚 3.5 重量 501.37 瓦状瓦 空芯/平坦な川原石を利用。表面と両側面はよく被れています。			No34 脊り方	(調文時代)

Tab. 3 遺物観察表（2）

H-4号住居跡

番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
11	石製品 石斧	長さ27.1 最大幅31.0cm 重量2,200	最大厚16.6 重量2,200 破成片 断面形／一面に芯打痕。	No.6 中層 No.8 下層	破断。
12	石製品 石斧	長さ17.9 最大幅6.5	最大厚4.0 重量777.18 完形／棒状の川原石を使用。	No.14 中層	中央部断面に崩滅。
13	石製品 石斧	長さ16.5 最大幅7.1	最大厚4.5 重量820.66 安山岩 完形／棒状の川原石を使用。	中層	中央部断面に崩滅。
14	石製品 石斧	長さ13.9 最大幅6.7	最大厚4.7 重量591.32 安山岩 完形／棒状の川原石を使用。	中層	中央部断面に崩滅。
15	石製品 石斧	長さ16.1 最大幅7.5	最大厚4.9 重量809.39 安山岩 完形／棒状の川原石を使用。両端部に敲き痕。	No.22 周廻	中央部断面に崩滅。端部に芯打痕。
16	軽石	a: 長さ5.2 最大幅4.7 最大厚2.95 重量14.95 b: 長さ5.6 最大幅5.2 最大厚3.6 重量24.47		中層	発見断面。

H-6号住居跡

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④保存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 複合口縁器	口径 - 腹高 - 追徳 -	①焼成化粧 ②外：白 黒 内：にじみ 黄 ③白色釉、白色釉・石英	粘土細積み上げ。 外面：口縁部ハケ→棒状浮文（日本式）→ミガキ。 内面：口縁部ハケ→ミガキ。	前穴	
2	土師器 S字状 口縁器	口径(8.0) 腹高(4.0) 追徳 -	①焼成化粧 ②外：白 黒 内：黒胎 ③白色釉、輝石 ④口縁部1/4割	粘土細積み上げ。 外面：口縁部ヨコナザ、斜腹ハケ→断面ヨコハケ模様。 内面：口縁部ヨコカナザ。胸部ユビナザ→ナザ。	No.1 穴	外山被熱、内外面保付着。
3	土師器 S字状 口縁器	口径(15.0) 腹高(5.0) 追徳 -	①焼成化粧 ②外：白 黒 内：灰白 ③白色釉、石英、輝石 ④口縁部1/6	粘土細積み上げ。 外面：口縁部ヨコナザ。 内面：口縁部ヨコナザ。胸部ナザ。	上層 下層	口縁部内外面保付着。
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
4	石製品 石斧	長さ(15.5) 最大幅11.3 最大厚3.4 重量1678.81 一部欠損/自然石（川原石）を使用。各面ともよく削れて消滅している。		P2 底部		

H-7号住居跡

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④保存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 高杯	口径(8.8) 腹高(6.3) 追徳 -	①焼成化粧 ②外：にじみ 黄 ③白色釉、白色釉・石英、輝石 ④脚部少欠損	粘土細積み上げ。 外面：口縁部ヨコナザ。脚部ハケ→ナザ。 内面：口縁部ヨコナザ。脚部ナザ。	No.9P1 底部	脚部円孔は3ヶ所。

H-9号住居跡

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④保存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 S字状 口縁器	口径(16.0) 腹高(5.0) 追徳 -	①焼成化粧 ②外：にじみ 黄 ③白色釉、白色釉・石英	粘土細積み上げ。 外面：口縁部ヨコナザ。脚部ケズリ→ハケ。 内面：口縁部ヨコナザ。脚部ナザ。	上層	

H-10号住居跡

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④保存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 S字状 口縁器	口径 - 腹高(4.5) 台輪底径(10.0)	①焼成化粧 ②外：にじみ 黄 ③白色釉、輝石 ④台輪部1/4	粘土細積み上げ。 外面：台輪ナザ。 内面：台輪ナザ。	H-10b 屋上	外山に保付着。

H-11号住居跡

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④保存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 S字状 口縁器	口径(11.0) 腹高(2.9) 追徳 -	①焼成化粧 ②外：灰白 腹：白色 ③白色釉、白色釉・石英	粘土細積み上げ。 外面：口縁部ヨコナザ。 内面：口縁部ヨコナザ。脚部ナザ。	No.1 下層	

4号墓跡

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④保存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	土師器 S字状 口縁付腰盤	口径 - 腹高(7.2) 台輪底径(7.0)	①焼成化粧 ②外：灰白 腹：白色 ③白色釉、白色釉・石英	粘土細積み上げ。 外面：脚部ケズリ→ハケ、右部ナザ→上半ナザ。 内面：脚部ナザ。右部ユビナザ→トキナザ。底部・右部内側砂拂で行け。	H-1 東側 [M2墓]	
2	石製品 擦り石	長さ2.5 最大幅4.7 最大厚4.4 重量48.68 2/2現存／不整形の自然石（輕石）を使用。表面・両側面は良く削れています。			[M2墓]	

遺構-出土遺物

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④保存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	調理土器 深鉢	口径 - 腹高 - 追徳 -	①焼成化粧 ②外：にじみ 黄 ③白色釉、白色釉・石英	粘土細積み上げ。 外面：脚部ケズリ→ハケ、右部ナザ→上半ナザ。 内面：脚部ナザ。右部ユビナザ→トキナザ。底部・右部内側砂拂で行け。	H-1 腹り方 [M2墓]	縄文時代中期後葉 (加賀利E3式)。
2	須恵器 甕	口径 - 腹高 - 追徳 -	①焼成化粧 ②外：灰白 腹：白色 ③白色釉、白色釉・石英	粘土細積み上げ→ヨコラテ模様。 外面：口縁部ヨコナザ。 内面：口縁部ヨコナザ。脚部ナザ。	表土	平安時代前期 (8世紀)。
3	青磁 輪窯灰文瓶	口径 - 腹高 - 追徳 -	①焼成化粧 ②外：灰緑 ③白色釉 ④体部破片	ヨコラテ形成。 外面：体部陶ナザ→輪窯灰文→施釉。 内面：体部陶ナザ→施釉。	複数	縄文後期系 (13世紀後半)。 器表面は風化していいる。
4	圓座陶器 甕	口径 - 腹高 - 追徳 -	①焼成化粧 ②外：灰白 腹：灰黄 ③白色釉 ④脚部破片	粘土帶積み上げ→叩き。 外面：脚部ヘナナザ。 内面：脚部ヘナナザ。	表土	常滑産陶 (6a ~ 6b 世纪) (10世紀後半)。 外表面は輪灰灰による 自然釉が剥がれる。

写 真 図 版



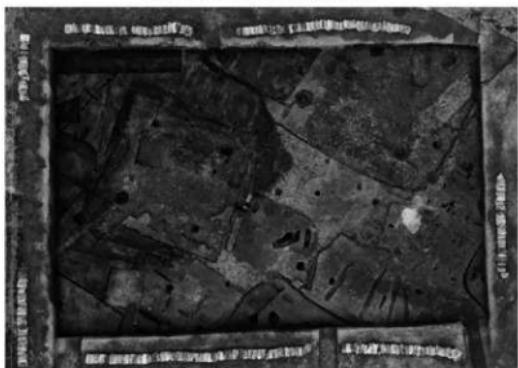
調査区遠景（東から）
右上に棗名山、中央左上に国史跡古高遺跡。



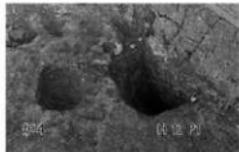
H-1号住居跡 完掘（北西から）
左下のH-3が本窓穴を破壊する。



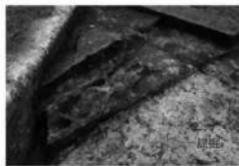
H-1号住居跡 伊1～3 全景（西から）
最新の伊1周囲の灰は踏み締められていた。



調査区全景 完掘（左上が北）



H-1号住居跡 伊4/H-12号住居跡 PI
全景（南から）とともに振り方面で確認した。



H-1号住居跡 南壁地土検出（北東から）
窓穴隙上部はⅢ層C混土、右上に間仕切磚。



調査区全景 振り方面（左上が北）



H-1号住居跡 遺物出土状況（南から）
北西隅の復原に熱海石が集中していた。



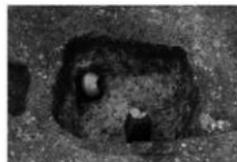
H-1・12号住居跡 振り方全景（左が北）
古いH-1は四隅主柱穴構造と推測する。



H-2号住居跡・D-1号土坑完掘（北西）
H-2はH-1より新しい可能性がある。



H-3号住居跡 完掘（北西から）
ほぼ地床で、北西と南西に貯蔵穴をもつ。



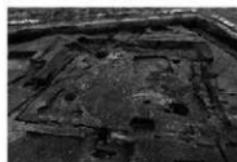
H-3号住居跡 貯蔵穴1 完掘・
遺物出土状況（南から）



H-3号住居跡 貯蔵穴2・周縁近景（西）
薄鉢状断面の周縁が併設される。



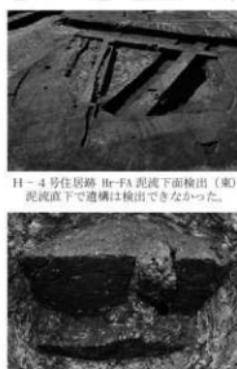
H-3号住居跡 遺物出土状況（南から）



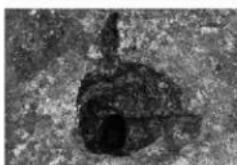
H-4号住居跡 完掘（南から）
壁穴外テラスと壁穴内襖状施設がめぐる。



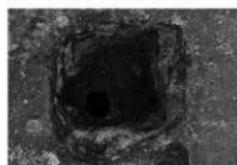
H-4号住居跡 覆土上部のHr-FA 泥流および1c号島跡 検出状況（東から）
中央は1a号島跡。経過は壁穴埋没→FA 泥流→1c 島→シルト質土（泥流か）→1b 島→1a 島。



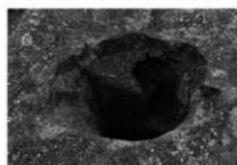
H-4号住居跡 Hr-FA 泥流下面検出（範囲）
泥流直下で遺構は検出できなかった。



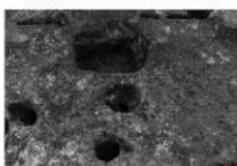
H-4号住居跡 P2 空洞柱痕完掘状況（西）
柱痕内には小土塊が少産入っていた。



H-4号住居跡 P3 空洞柱痕検出状況（西）
段下げ時では柱痕は不明瞭であった。



H-4号住居跡 P1 柱痕検出状況（西）
空洞柱痕の外周縁は粘土化していた。



H-4号住居跡 P6・P13・貯蔵穴全景（北）
画像手前には硬化周縁があり、出入口を示す。



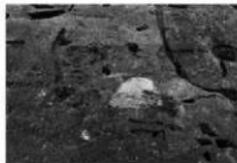
H-4号住居跡 P6 遺物出土状況（西から）
破砕土器片が充填された旧出入入口ビット。



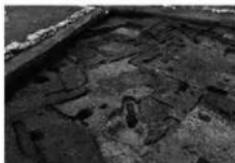
H-4号住居跡 通り方全景（上が北）
本住居は廻木痕の上に構築されていた。



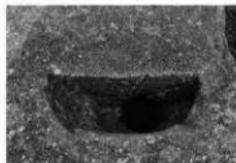
H - 4 号住居跡 土層断面・遺物出土状況（南から）
覆土上層の Hr - FA 泥流が 1 号床跡に耕起され、波状断面を明瞭に形成する。



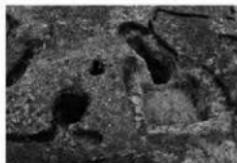
H - 5 号住居跡 鋸り方全景（北西から）
壁穴が浅く、鋸り方しか残存していない。



H - 6 号住居跡 完掘（南東から）
北東を H - 4 、南西を H - 7 が破壊する。



H - 6 号住居跡 P1 空洞柱痕出（南から）
柱痕下位は明瞭に空洞化していた。



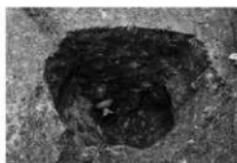
H - 6 号住居跡 P5・P6（出入口ピット）・
主柱穴 P3・貯蔵穴全景（南から）



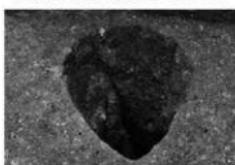
H - 6 号住居跡 伊 1 検出状況（西から）
貯蔵穴覆土に沈み込む状態で検出した。



H - 7 号住居跡 完掘（東から）
新旧周縁が二重に造り、新旧主柱穴が近接する。



H - 7 号住居跡 P1 完断・遺物出土（西から）
高杯が底面付近に埋納されていた。



H - 7 号住居跡 P2 覆土中現化物 検出状況
(北東から) イネ科茎による遮か。



H - 7 号住居跡 鋸り方全景（北から）
右側の P1 は、H - 6 主柱穴 P4 と重複する。



H - 8 号住居跡 完掘（東から）



H - 9 号住居跡 完掘（北から）
内 - 9a 住の床面。



H - 9 号住居跡 近景（東から）
手前は H - 9b 鋸り方、奥は H - 9b 床面。



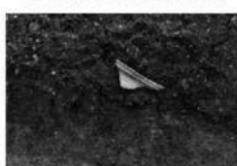
H - 10a 号住居跡 完掘（西から）
旧壁穴を厚く埋め戻して新床面を形成。



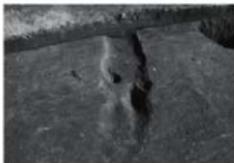
H - 10b 分住居跡 鋸り方全景（西から）
新壁穴は周溝分だけ膨張する。



H - 11 号住居跡 完掘（東から）
壁穴覆土は 4 号晶跡と非常に近似する。



H - 11 号住居跡 遺物出土状況（西から）
壁面は 4 号晶覆土（W 帶）。



W-1号窯 完窯 (北西から)
B-1と重複し、本窯が新しいだろう。



W-2号窯 完窯 (北東から)
埋没と再掘削を繰り返す。右にW-4のプランがある。



W-4号窯 完窯 (西から)
ほぼ東西を指向し、W-2と並走する。



Ia・1b号窯跡 確認状況・全景 (西から)
H-4の真正に構築される。手前は2号窯。



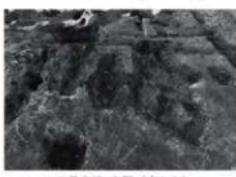
2号窯跡 完窯 (東から)
Ia・1b号窯跡と同一のFA混晶。



3号窯跡 完窯 (東から)
1・2号窯跡と同時期のFA混晶。



4号窯跡 確認状況・全景 (北東から)
窓壁基本土層のほぼ全面がC混晶覆土である。



5分窯跡 完窯 (南から)
4号窯の南北窓間群と同一のC混晶。

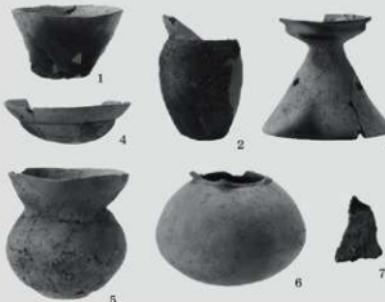


6号窯跡 完窯 (右上が北)
浅く不規則ながら鉛錠の平行・直交は視認できる。

H-1号住居跡



H-3号住居跡

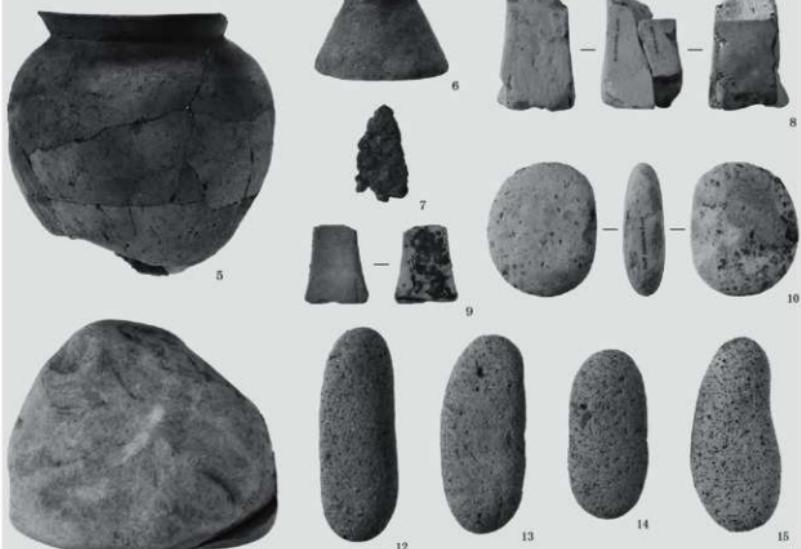


H-4号住居跡 (1)



出土遺物 (1)

H - 4 号住居跡 (2)



H - 6 号住居跡



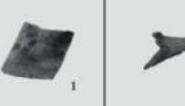
H - 7 号住居跡



H - 9 号住居跡



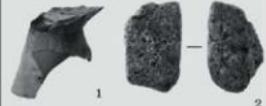
H - 10 号住居跡



H - 11 号住居跡



4号窑跡



造模外



出土遺物 (2)

抄 錄

フリガナ	エダムラニシイセキ ナンバーニ
書名	江田村西遺跡 No. 2
副書名	老人ホーム建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	並木史一 松本喜臣 南田法正
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所
〒	379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1 TEL. 027-265-1804
発行機関	前橋市教育委員会
発行年月日	西暦 2023(令和5)年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)			
江田村西遺跡 No. 2	群馬県前橋市 江田町字村西 361、 363-1、363-3、 363-4、363-5、 365-3、366-1	0275 0276	4 A 279	36° 139° 22' 02' 19" 16"	2022.10.10 ~ 2022.12.17	216	老人ホーム 建築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
江田村西遺跡 No. 2	集落跡 畠跡	古墳 平安 中世 近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 畠跡 溝跡 ピット	12軒 1棟 1基 6ヶ所 4条 46基	縄文土器 土師器 須恵器 陶器(常滑) 青磁 石器 石製品 鉄製品	古墳時代前～中期の拠点的集落か。住居跡の建替え・重複事例多い。 調査区全面に古墳時代前期から後期にかけての畠跡が広がる。 古代～中世にかけての用水路は東西条里地割をおおむね指向する。 遺構外出土の青磁碗・常滑甕(ともに13世紀後半)は中世の掘立柱建物に関わる可能性がある。

江田村西遺跡 No. 2

—老人ホーム建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和5年5月22日印刷

令和5年5月31日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所

発行／前橋市教育委員会

前橋市總社町 3-11-4

TEL 027-280-6511

印刷／朝日印刷工業株式会社